

書評

英国学派入門 — 国際関係論へのアプローチ

バリー・ブザン 著 大中真 他 訳 日本経済評論社
2017年5月発行 312ページ



幡新 大実

本書の4人の訳・編者の1人、大中真氏とは2004-2005年にオックスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジの上級客員研究員同士であった。当時、評者は大中氏をバルト諸国の地域研究者として認識していた。大中氏はそのときに培った人脈から帰国後、立命館大学の安藤次男と佐藤誠を中心とする「英国学派」の国際関係理論の研究会に参加、これまで共同で多くの訳書や研究書を世に問うてきた。その間、桜美林で教鞭をとりながら一橋大学で博士号を取得し、准教授に昇進するなど着々と国際関係論の研究者としてその足場を固めてきた。今や地域研究と理論研究の両方に通じる本格的な研究者の1人である。こういう研究者は決して数は多くない。なお、大中氏が注釈するように「英国」はこの文脈ではイングランドを指していて、実際、もともとスコットランドが入っていなかった。

今回のこのブザンの大作の大中氏らによる邦訳についての書評の執筆は、評者自身、英国ランカスター大学において知らず知らずのうちに「英国学派」の中で学んでいたことを発見し学習する過程となった。例えばブザンが今回の著作の前作と位置付けられる2004年の著作 *From International to World Society?* を献じているリチャード・リトルから国際関係の諸理論を教わり、アラン・ジェイムズの系譜のトラバースを指導教員とし、ジェイムズ教授には博士論文の学外審査員を引き受けて頂いた。

評者は「英国学派」なる名前も中身も知らないまま留学し、時事問題と政策問題を意図的に避けてきた「英国学派」にとっては邪道の題材で論文を書いて、もの足らずに英国法曹会に入った。英国人は、国際関係に限らずおよそ理論というものが嫌いであり、そのことをむしろ誇りに思っているように評者には見えた。評者にとって「理論」の代わりになる背骨を自ら探し求めて試しに突入していった分野が英国法だった。結局、その英国コモンローの伝統も決して理論的ではなかった。プラグマティズムというのか、ヒューリスティックな (heuristic 「発見」的) 経験則の支配する技芸 (art) である。分野は違うが、英国人の国際法の大家、ブラウンリーも言った。国際法の理論など、その理論を奉じる人間の考え方を理解する目的以外で役に立ったことはない。だから、大中氏の「英国学派」の「理論」に関する作品に接するにつけ、評者は心の中で思ったものだ。なんと場違いな研究なことかと。

本書を読み、評者は自己の見方が間違っていたと思い直すのではなく、むしろ概ね正しかったと再確認している。逆説的だが、これは決してこの作品をけなしているわけではない。その逆である。英国学派に知らず知らずの間に骨の髄まで毒されていた自己を再発見したのである。

アメリカの圧倒的な影響下にある日本では理解されにくいかも知れないが、国際関係は決して物理学ほど厳密ではない。政治「力学」という言葉はあるが、人間と、人間の構成する社会や慣習や制度という、およそ数式で厳密に計算できない題材を扱っているのだから仕方がない。リチャード・リトルは授業で言った。厳密科学 (exact science) の理論と規範理論 (normative theory) は違うと。ヒューリスティックな発見的方略 (heuristic strategy) という方法論はまた違う。古代ギリシャのアリストテレスは自然学よりも倫理・政治学の方が成功したが、後者の方法論は厳密さの反対であり、その理由は、方法論が探究の対象の性質に応じているからであると言っている (ニコマコス倫理学)。該当部分のギリシャ語と評者なりの英訳をある英国人に見てもらったところ、ここにこそアリストテレスの偉大さがあり、気に入っているという「英国らしい」感想が漏れた。留学当初、いきなりツキディデスを講じるリトル教授の机の上にはホメロスの像が置いてあって、ひげをたくわえたりトル教授の風貌と重なるところがあったことを懐かしく思い出す。

大中氏は、訳者あとがきで著者バリー・ブザンが、もともとコペンハーゲン学派から出発し「英国学派」を外から見て、その再結集を目指して中に飛び込んでいった研究者であることを紹介している。アリストテレスが政治学はおとなになってある程度の経験を積んだ人間の学ぶものだと言ったのと同じ意味で、英国学派には「おとな」を引き付ける力がある。評者も、この機会に、英国学派の真価をもっと上手に説明できるように、本書を精読する必要があるようだ。

